

内山秀夫・香内信子編

與謝野晶子評論著作集 1～22 卷

(2001/2002 龍溪書舎 ISBN4-8447-3522-5 C3395 全巻 220000円+税)

田川 建三



M・ウルストンクラフトの *A Vindication of the Rights of Woman* (1792) は今も文庫本で安価に手に入る (Penguin Books, 1992, 約1200円)。S・ド・ボーヴォワールの *Le deuxième sexe* (1948) も同様である (le livre de poche, tome 2, 約900円)。たまたま現在は第1巻は品切れ。近いうちにまた出る。しかし以前からの nrf 叢書のものは相変わらず手にはいる。こちらもペーパーバックで第1巻は約2400円)。では与謝野晶子の評論はどうか。岩波文庫の評論集 (1985年) は1990年代ですでにはほぼ常に品切れ状態だった。その後も一度増刷されたが、今また手に入らない。大学の女性学の授業などで必読書として推薦しても、学生たちは本屋さんで買えませんでした、と言う。それに本当はこの抜粋の文庫では役に立たない (後述)。

これは困った状態である。この国の文化状況として極度に恥ずかしい。日本のフェミニズムの貧困の象徴と言えよう。しかしこれはフェミニズムだけの問題だろうか。フェミニズムがしっかりと大衆の中に根を張るには文化状況全体の質が確保されねばならぬ。フェミニズムだけが発達する、というわけにはいかない。いや、確かに与謝野晶子は立派だが、しよせん昔の古典であって、現代には通用しない、従って一部の専門家にしか用いない代物だ、とおっしゃるだろうか。しかしまさにその発想が日本的貧困なのだ。ボーヴォワールの方が与謝野晶子よりも一世代も若い、と読んでみると、とても今では通用しない要素が大量に出て来る。しかしフランス語の人たちは皆相変わらずボーヴォワールを読み続けている。ましてウルストンクラフトは二百年以上も前である。何故彼らはいまだに多くこれを読むか。いきなりそのまま現在に適用できるかどうか、などという狭量な視点で読んでいくわけではないからだ。自分たちの歴史を作ってきた根幹を認識することが、自分たちの位置の正確な認識になる、と知っているからだ。もっとも、以上三人いずれも、今読んでも、まるで現在の状況に直接語りかけているかのように新鮮な部分が非常に多い、ということもつけ加えておかねばならないが。

ではいま与謝野晶子の評論を読むにはどうしたらいいか。講談社版の全集 (1979 - 1981年) は、出版されてあまり年数もたたないうちに品切れとなって、買えなくなった。図書館に行って読めばいいとおっしゃる人は御近所の公共図書館にお出でになるといい。大きめの図書館は別として、一般の市立図書館ぐらいでこれが置いてあるところは稀である。私はある比較的大きな市の図書館で、せめてこのくらいは置いておいて下さいよ、と申しあげたことがある。返事は、うちは市民のための図書館ですから、そういうものは置きません、と言われてしまった。ちなみにこの司書は女性である。これは与謝野晶子に限らず、日本の公共図書館の根本問題だから、ここでは深入りしないが、かくして、比較的専門家以外の読者にとっては、与謝野晶子の評論は閉ざされっぱなしなのだ。

こういう状況で、昨年龍溪書舎から評論をすべておさめた著作集が出るようになった時は、まさに暗夜にさしこむ光、まことに嬉しかった。しかし結論から言うと、今までのところこれまた講談社版の二の舞である。文庫判、ペーパーバック、一冊千円なにがし、という世界からは桁違いにほど遠い。全22巻まとめて買う人以外は購入できない。それも全巻で22万円である。これを個人で買うのは、本当に狭義の専門家だけだろう。とすると主として図書館用である。しかしそれならすでに講談社版がある図書館はなかなか買わないだろう。ただし龍溪版独自の長所については後述。なおほかに最近だけでも大空社から『一隅より』が一万円。勉誠出版から『一隅より』が六千円。何故『一隅より』ばかりをあちこちでこれだけ高価に出すのか？

どうしてこれだけ高価か。龍溪版は発行部数が300部にすぎないからだ。この部数ではやむをえない。これは龍溪書舎の責任だろうか。この出版社は非常に良心的である。ふつうは、書評用ですからと問い合わせても、出版部数を教えてくれるところは少ない。龍溪の編集者はすぐに300部だと教えてくれた。要するに、売れる見込みが



なければ 300 部しか発行できず、従って定価はひどく高くなる。責任は、売れる見込みのない読書状況を作っている日本の文化水準全体にある。しかし、ほかの本ではない。与謝野晶子が売れる見込みがないとなれば、日本の女性学者全体が深刻にものを考える必要があろう。今重要なのは、できる限り多くの人が、読みたいと思ったら、すぐに与謝野晶子の評論を安価に入手できるようになることだ。しかしその前にまず、読みたいと思う人が増えないといけない。それが達成できないところに、日本フェミニズムの底の浅さがある。

高価である代償に(?)、龍溪書舎版は(大空社版も)原著の写真版である。実はこの方が復刻本の出版としては容易である。頁を写真にして、そのまま印刷にかければすむ。表紙と奥付を別とすると、当時の本そのままである。御親切に、巻末の広告までそのまま再現してくれた。しかし解説も註も何一つついていない(ただし後述)。

昔の本をそのまま写真版で出版する方が「学術的」なのか。まさか。現代において復刻版を学術的に作るには、それなりに新しい作り方があろう。私の本職は新約聖書学である。わかり易い例としてルターの新約聖書翻訳を例にとろう。16 世紀のテキストの復刻版はふつう我々はレクラム文庫版で読む(上下二巻で約 2500 円)。安い。しかしこれがふつう入手できるものでは最も学術的な発行である。ルターの生前に発行された諸版のうち最も重要な六つの版の相互の相違が詳細に註に記載されている、等々。16 世紀の原本の高価な写真復刻版などを見るのは、今やどちらかというと好事家の骨董趣味に属する。

与謝野晶子の評論についても必要なのはそういうものではなかろうか。各巻に必要な註と解説(学術的な水準の。無意味な解題などいらない)。レクラム版の活字は 16 世紀の複雑な亀の子文字ではなく、現代の読みやすいローマ字である。日本語の場合も今や、読みやすさを基準にするなら、旧漢字、旧書体の仮名などにこだわることはない。新漢字、現代書体で十分である。言語的価値からすれば、それは同じ文字なのだ。無理に読みにくい写真版にする必要はまったくない。原著の字体を知りたい人は図書館でチェックすればいい。ただし旧仮名遣いにするか新仮名遣いにするかは議論のあるところだから、ここでは深入りしない。

というわけで、龍溪版全 22 巻のうち既発行の 15 巻は、講談社版を買い損ねた図書館用である。しかしどうせ図書館に行くのなら、写真版より原物を見る方がいい。ただし龍溪版の極めて重要な長所は、未発行の 16 - 22 巻に

ある。うちまず 16 - 21 巻は与謝野晶子の生前に単行本に再録されなかった文章を集めてある(これは講談社版全集にもはいっていない)。確かに御本人はこれらの文章を単行本に収録しなかった。しかし今となってみれば、彼女の思想の全容を正確に知るために非常に重要である。この仕事はまさに今回の編集者の香内信子さんの独断場である。彼女は生涯かけて、与謝野晶子の評論文を調べつくしてきた。この 16 - 21 巻の故に、龍溪書舎版は歴史に残る貴重な出版となる(残念ながらこの書評を書いている 2002 年夏の段階ではまだ第 16 巻以降は発行されていない。本当はこの書評はこれらの巻の中身を中心にして書くべきだったが、出版の遅れの故に、ここでは予告しかできない)。もう一つ重要なのは、最後の 22 巻である。これは全巻の語彙等の詳しい索引、それに各巻の解説、註にあてられる(香内さんと、もう一人の編者の内山秀夫さんによる)。詳細な索引は貴重である。しかし、我々の希望からすれば、解説と註は各巻それぞれにつけて欲しかった。なお、この巻だけは別売されるから、切り離して入手できる(八千円)。

最後に、与謝野晶子の評論について、何故全体を読む必要があるかということを一言記して終りにしよう。女性にかかわる諸問題を論じる与謝野晶子の姿勢はとことんまで理性に立脚しようとしている。このことは意外と知られていない。「情熱の歌人」などというレッテルのせいで、彼女のこの最大の長所がほとんど認識されないのだ。しかし「情熱的」と呼ばれる彼女の歌の基底にも、みごとに透徹した理性が横たわっている。この場合「理性」とは、下手くそな合理主義信仰だの理論的な理性の礼賛だの、といったものとは関係がない。何につけ細部の細部にいたるまで正確な知識を大量に積み上げ、その上に立ってはいじめてものを考える、という姿勢である。詳しく紹介するいとまがないが、たとえば色や趣味について彼女がもの言う場合の緻密正確な知識にこだわるこだわり方。あるいは宗教を批判する姿勢。これらの問題に見られる彼女の理性的姿勢が、女性の労働をめぐる、あるいはたとえば離婚その他家族制度にかかわる問題をめぐる彼女の議論の深く広い射程を支えている、ということが理解されねばならぬ。ほかにもいろいろ。従って彼女の思想的姿勢の基本的、有機的な質を知るためには、抜粋の評論集でなく、全体を読む必要がある。

(たがわ・けんぞう 新約聖書学者)